

農村未来を考える研修会が開催



ローマ法王に地元米を食べてもらおう

（くい）市の市役所職員でもありません。この人が、知る人ぞ知る地域おこしの仕掛け人として、全国に名を轟かした伝説的なスーパー公務員です。

今回のお話はローマ法王に地元米を献上するまでのストーリーなのですが、本当の目的は東京のデパートに地元米を売り込むのではなく、買わせる為の壮大な作戦でした。

高野さんの担当していたのは神子原（みこはら）という限界集落です。高齢化率50%を超す農村の活性化が仕事でした。そこでなんとか農業収入の増大を考えました。

さまざま挑戦、失敗を繰り返します

八方原ふれあい朝市感謝デー



配られた紅白餅のラベル

が、彼は土地の名前を利用しようと考えました。神の子の高原でできたお米をキリスト教の指導者に食していただくにはどうしたらいいのか、思い切つて手紙を書きます。何度も何度も出したのです。その間には米国の大統領に断られ、宮内庁にお願いして頓挫するという失敗をするのです。

諦めかけていたところに、バチカン市国の大使館から「すぐに米を届けるように」と連絡が来ます。そして献上することが決まるのです。その瞬間から羽咋市の神子原米は「ローマ教皇が食された米」のレッテルが輝きだします。キリスト教関係でなく、様々なところから注文が来ます。ところが東京のいわゆる富裕層の住まいの多い地域からの注文には一切答えなかったという

八方原ふれあい朝市が開店15周年を迎えました。15年、不断の努力が今日までの歴史を刻んできたということです。

11月9日、感謝の心を込めた「紅白餅」が来店者に配られました。朝市は農家が自分の商品に値段をつけて、自分たちで売りながら、消費者と直接話をする機会を得られる「かけがえのない機会」と考えられます。今後、ますます頑張つて欲しいものです。



高野さんの今の肩書は教育委員会の文化財室長

減反政策が変わる

コメの価格維持を主眼に生産量を調整してきた「減反政策」が大きく変わろうとしています。

補助は次第に少なくなります、農家は自らの判断で生産することができますようになります。新しい挑戦をする農家にとっては、有利な部分もあるかもしれません。

「その米を全量売ってくれ。」待望の取引です。「分かりました。1kg 700円の10%引き、袋は一枚125円、引取に来てください。」
今や、神子原米は日本のトップブランド米の五指にランクされています。